



全国の会員が大分に集う

「新時代」

笑顔で生き生き透析ライフ！

七月七日(日)午前九時十五分より大分市のレンブランドホテル大分において「二〇一九年度全腎協全国大会IN大分」が盛大に開催されました。(紙面の都合上、内容の一部を抜粋して掲載させていただきます。)

全国から約七〇〇名の患者やその家族、医療関係者の方々が一堂に会しました。

福岡県からは、森満義彦会長をはじめ、中島由希子事務局長等総勢四十二名の参加があり、「さわやか」から岡副理事長が参加しました。

次の世代に伝えるべく

日々活動に取り組む

初めに、一般社団法人全国腎臓病協議会(以下全腎協)の馬場享会長が、「私たち全腎協は、『いつでも、どこでも、誰もが必要な時に人工透析が受けられる』ことを求めて始まり、その実現こそが長年の活動の柱となっています。」

そして先人たちがまさに命を削り築き上げた現在の制度を守り、次の世代に伝



一般社団法人
全国腎臓病協議会
馬場 享会長

えるべく、今も日々活動に取り組んでいます。

しかし、患者会への無関心、患者の高齢化などを背景に、全腎協への入会率は年々低下し、組織率の減少は止まりません。

このまま手をこまねいては、設立以来掲げてきた『患者が安心して生活し、療養ができる環境』を堅持することが困難になります。

それを防ぐためには、確固たる組織基盤の構築が不可欠です。

先人から受け継いだ『活動の火』を消すことなく未来に繋いでいくために、組織強化対策を今年度の最重要課題として取り組みます。



2019年度全腎協全国大会IN大分の様子

今一度全国の仲間が一丸となって全腎協結成の頃の初心に返った活動が必要とされます。

一人ではできないことも、仲間が集まり一丸となれば、不可能が可能になることを先人は私たちに教えてくれました。

今日、ここ大分に全国から仲間が一堂に会し、旧交を温め、明日への勇気と活

事務局よりお盆休みのお知らせ

8月10日(土)より

8月18日(日)まで

事務局はお休みします。

ボランティアさん及び利用者の方には

個別にお知らせします。

力を得ることができました。患者の超高齢化・要介護者の増加などの厳しい課題に対し、全国の仲間が一つとなって、腎臓病患者、人工透析患者のよりよい療養生活の実現を目指して共に頑張りましょう」と挨拶されました。

続いて、大分県腎臓病協議会の池邊徳幸会長は「新時代の大会を契機として会員拡大、ips細胞による『再生医療』が普及し、透析から解放された未来が描ける大会にしたいと思っています」と話されました。続いて、来賓挨拶がありました。

日本の透析患者の予後などは

世界の中で圧倒的に良い初めに一般社団法人日本透析医学会の中元秀友理事長が「日本の透析患者の予後やADL(日常生活動作)、生活状態などは、世界の中で圧倒的に良い状況にあります。」

これは約五〇年間全腎協と手を携えてきた成果です」と話されました。

また、一般社団法人日本移植学会の江川裕人理事長は「脳死からの臓器移植がなかなか増えていきません。調査では六〇%の人が臓

器提供をしても良いと云っておられるのですが、移植が進まないのは、提供側の救急の医師があまりにも多忙であるとか、移植側の外科医の数が足りないなど医療の体制が整備されていないなどの大きな要因でした。

しかし、今後は体制が改善されていき、移植は増えてまいります」と貴重なお話を伺うことが出来ました。

次に、長期透析四〇年の表彰式が行なわれました。

今年、全国で一四八名の方が長期透析者として表彰され、福岡県では九名が表彰の対象でした。

今回の大会には六名の表彰者が参加し、福岡県からは、柴田伊津子さんと棚橋良治さんが出席され、馬場会長から表彰状が渡されました。

次に、大会決議(裏面参照)が読み上げ、採択されました。

このあと、午前に二講演、午後一講演が行なわれ、どれも透析をしている方には関心の高い演題でした。

(裏面へつづく)





記念講演

再生医療で腎臓病患者が ゼロになる日を目指して

京都大学 i p s 細胞研究所増殖分化機構研究部門
教授 長船健二先生

(表面よりつづき)

次に、京都大学 i p s 細胞研究所増殖分化機構研究部門の長船健二教授による『再生医療で腎臓病患者がゼロになる日を目指して』と題して記念講演がありました。

長船教授は、「i p s 細胞を使ってこれまで治すことができなかった病気を治せる時代が来ようとしています。腎臓は i p s 細胞で作るのが難しい臓器です。i p s 細胞から腎臓を作ることがまだ先のことになります。」



京都大学 i p s 細胞研究所増殖分化機構研究部門
長船 健二教授

大会決議

(一社) 全国腎臓病協議会
大分県腎臓病協議会

私たちは、1971年『いつでも、どこでも、誰もが必要な時に人工透析を受けられる』ことを目的に立ち上がり、全国の仲間が集結し、活動を開始しました。そして2年後の2021年に全腎協は、結成50周年を迎えます。

先人の命を懸けた活動と半世紀以上にわたり研究・開発に取り組んでこられた関係学会の先生方をはじめ多くの関係者のたゆまぬ努力の積み重ねによって、誰もが必要な時に人工透析を受けられることができ、その技術水準は世界一とも言われるようになりました。

しかし、患者の超高齢化とともに私たちを取り巻く環境が大きく変わろうとしています。患者会への入会率は年々低下し、組織率の減少は止まりません。先人たちの患者会活動の成果として、身体障害者福祉法の対象になったことで、疾病、障害のなかで最も充実した医療保険制度や厚生医療などの公費負担医療制度を勝ち取っています。半面、多くの方に患者会活動の大切さを訴え切れません。このまま手をこまねては、さらに組織率が低下することがほぼ確実です。

加えて、透析患者をとりまく社会保障制度は大きな転換期を迎えています。医療や介護を中心に、自己負担の引き上げや保険給付範囲の縮小など社会保障費の削減、抑制が実施され、この動きは今後も続くものと危惧されます。

私たちの重要な活動の一つとして掲げてきた『患者が安心して生活し、療養ができる環境』をこれからも堅持するためには確固たる組織基盤の構築が不可欠です。先人から受け継いだ『活動の火』を消すことなく未来に繋いでいくために、全腎協は、組織強化への取り組みを今年度の最重要課題としています。

私たちは、先人から命の大切さや病気に負けない勇気を学び、また、医療従事者、介護従事者、ボランティア、家族等多くの人に支えていただいていることを忘れず、心から感謝の気持ちを胸に、全国の仲間が今一度、手を繋ぎ、団結し、心を一つに腎臓病患者・人工透析患者の療養環境を守る活動に取り組んでいきましょう。『一人ひとりが手をつなぎ！プランからアクションへ！そして笑顔に！』を合言葉に、全国の仲間が一丸となって歩んでまいりましょう。

現在、2〜3mmの i p s 細胞を作ることが出来ます。これを1〜2cmまで大きくし、機能の落ちた腎臓に移植をして、一割の腎機能を維持することが出来れば、

透析に入らなくて良いので」と話されました。次に、大分大学医学部付属病院臨床栄養管理室の利根哲子主任栄養士による『毎日の食事管理とご褒美飯の選び方』と題して栄養講演がありました。利根主任栄養士は、「食事制限を気にしているあまり、エネルギー不足やたんぱく

質不足になることがあるので、自分で合った食事療法をするのが大切です。



長い間、続けていかなければならない食事制限です。

から、ご褒美飯をときどき摂って、モチベーションを維持できるようにしてください」と話されました。次に、医療法人光心会の武居光雄理事長による『包括的腎臓リハビリテーション』と題して医療講演がありました。武居理事長は「以前は腎機能が落ちていた場合は、良くなる運動をすることは良くないとされてきましたが、現在では積極的に運動するほうが良いことが分かってきました。」

腎臓リハビリテーションとは、腎疾患や透析医療に基づく身体的・精神的影響を軽減させ、症状を調整し、生命予後を改善し、心理社会的ならびに職業的な状況を改善することを目的として、運動療法や食事療法、水分管理、教育、精神、心理的サポートなどを行なう長期にわたる包括的なプログラムです」と話されました。皆さん最後まで話を聞き入っていました。午後二時に全てのプログラムが終了し、盛会のうちに閉会しました。来年は、福島県郡山市で五月十七日(日)に開催されます。